

学位論文題名

宗教文化交流による日韓宗教市場の再編

－日本の新宗教と韓国のキリスト教を事例に－

学位論文内容の要旨

本論文のタイトルにある韓国と日本における宗教文化交流とは、一方では1980年代から創価学会が韓国で教勢を拡大し、公称現在140万人の信者を獲得して、韓国第4の宗教勢力となったことと、他方では同時期の日本において韓国のプロテスタント教会が盛んに宣教活動を行い、日本のキリスト教にペンテコステ運動やカリスマ運動的な傾向の強い福音主義の影響を与えたことを意味している。

韓国では植民地時代から日本の既成宗教・新宗教の布教が進められ、解放以後も在日コリアンによって日本の新宗教は布教されている。その中で、なぜ、反日感情が強い韓国にナショナリズム的色彩が強い日蓮正宗系新宗教が勢力を拡大できたのか。或いは、西欧ミSSIONの基盤があり、理知的傾向が強く、他方でキリスト教が人口の1パーセントを超えて拡大しない日本社会において、なぜ、聖霊体験を強調する韓国系キリスト教が新たな福音系教会を新設していくことに成功しているのか。

このような宗教の相互交流の現状に対する疑問を解決するべく、韓国側、日本側でそれぞれ研究は進められていたが、韓日の比較研究を個人で成し遂げた研究者はいなかった。李賢京氏は、日韓の宗教市場における需要と供給という観点から、日本の新宗教が韓国の諸宗教が提供できない宗教財を持ち得たこと、韓国のキリスト教会が日本のキリスト教会にない宗教体験を提供したことを明らかにしようとした。

具体的には、李賢京氏は、ほぼ5年間をかけて韓国側では4つの日系新宗教、日本では20箇所の韓国系キリスト教会を対象にアンケート調査、面接調査を行っている。以下が要旨である。

第I部「近現代における日韓両国の宗教文化の展開」では先行研究のレビューと本論文の理論的枠組みを提示した。

第1章「日韓における社会変動と宗教文化の変貌」では、現代の日韓両国における宗教状況を概観し、今日の宗教文化を生み出した日韓両国の社会背景を、(1)産業化・都市化、(2)戦後の高度経済成長、(3)国家の宗教政策の変化の3点で比較した。

第2章「海外における日韓の宗教の展開」では、日本の新宗教と韓国のキリスト教の海外布教に関する先行研究を踏まえて、韓国における日系新宗教と日本における韓国系キリスト教の受容について先行研究を検討し、日韓相互の宗教文化の受容(＝宗教文化交流)とその活性化の要因を分析する理論的枠組みとして、(1)グローバル化、(2)宗教市場理論(＝相補的対応)を提示した。

第Ⅱ部では韓国における日系新宗教の事例分析を行った。

第3章「韓国の宗教市場と日本の新宗教——韓国創価学会を事例として——」では、創価学会が、日本の植民地支配に起因する反日感情が根強い韓国社会において、(1) 現世志向主義の宗教実践を通して韓国の既成宗教との差別化を図り、(2) 信者の信心を持続させるためのシステム（激励・役職等）を採用し、(3) 個人で行うことが可能な宗教実践や単純明快な教えを提供することで都市生活者のニーズに適応して教勢を拡大したと述べた。

第4章「韓国における日本新宗教信者に関する一考察——韓国生長の家を中心に——」では、韓国生長の家（＝光明会）信者の特徴として、(1) 韓国既成宗教の信者に比べて高学歴・高収入で職業威信も高い、(2) 韓国における他の日系新宗教教団と比べて、光明会信者は人生の究極的意味への関心が高い、(3) 入信動機において、人生と真理に対する探究心や知的欲求の充足と、治病という日系新宗教が有する「貧・病・争」からの脱出欲求が同時に存在している、(4) 韓国の既成宗教とは差別化された布教戦略（水子供養に類する流産児供養、教団出版物の在宅配送）が用いられていることを明らかにした。

第5章「異文化交流の可能性と課題——韓国世界救世教に着目して——」では、若年信者と初期世代の信者との比較を通して、(1) 若年層信者の入信動機も初期布教世代と同様に「浄霊」であったが、教義の内面化を通して信心を確立し教団に定着している、(2) 若年層信者は自然農法・ブログでの宣伝活動などを通して、日本宗教信者というレッテルを克服すると同時に、教団の認知度獲得およびイメージの改善に努力していることを論じた。

第6章「『似而非宗教』と『倭色宗教』のあいだで——韓国天理教『3世信者』の信仰継承過程における『他者』の影響——」では、(1) 韓国は日本植民地経験に起因する反日感情が強く、そうした感情を持つ「教団外他者」が3世信者の信仰生活の弱体化に強く影響していること、(2) 「教団内他者」である同年代の仲間集団と親の寛容的な宗教教育態度が、3世信者の信仰生活の保持・深化に影響を及ぼしていることを明らかにした。

第Ⅲ部では日本における韓国系キリスト教会の事例分析を行った。

第7章「拡散する韓国のキリスト教と日本」では、韓国でキリスト教が1950・70年代に成長し、80・90年代に停滞した要因に関する先行研究を踏まえ、韓国系キリスト教主流派とペンテコステ派が共に日本宣教を行う背景を考察した。多くの韓国人ニューカマーの来日と日本のキリスト教会における聖霊体験の渴望などが受容の背景として考えられる。

第8章「日本における韓国系キリスト教会の動向に関する一考察——純福音教会を中心として——」では、(1) 大半の純福音教会はエスニック・チャーチとしての役割を担っており、聖霊体験を求める韓国人を信者として集めている、(2) 日本人信者の獲得状況は成功しているとは言えない状況であった、(3) しかし、純福音教会は日本人信者の獲得よりも日本のキリスト教会における聖霊運動の高揚に貢献したことが分かった。

第9章「『韓流』と韓国系キリスト教会——日本人メンバーの複層化に着目して——」では、韓国系キリスト教会に参加している日本人信者が、(A) 宗教的「救済」を求めて参加して教会に帰属意識を持つ「信者」、(B) 教会に「韓流」だけを求めて信者になることには抵抗感を持つ「非信者」、(C) 信者と非信者の間に位置する「信者周辺」の3類型に分けられ、日本における韓国系教会に通う日本人信者が複層化していることを明らかにした。

第10章「日本での定着をめぐる『旧』・『新』韓国系教会の再編成——20の教会間比較を通して——」では、(1) エスニック・グループの枠を超越できなかった「旧来」の教会の特徴として、在日コリアン信者のニーズの変化を認識しているものの、「民族教会」としてのプライド

を保持しようとする傾向があるため、信者のニーズに柔軟に対応できていないこと、(2) エスニック・グループを超えた「新来」の教会の特徴が、日本人・中国人・朝鮮族・野宿者へと、次々と新しい信者を獲得するために多様な布教戦略を模索していることを明らかにした。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 櫻 井 義 秀

副 査 教 授 宇都宮 輝 夫

副 査 准教授 樽 本 英 樹

## 学 位 論 文 題 名

### 宗教文化交流による日韓宗教市場の再編

－日本の新宗教と韓国のキリスト教を事例に－

本論文は、韓国と日本における宗教文化交流に関して5年間をかけて、韓国側では4つの日系新宗教、日本では20箇所の韓国系キリスト教会を対象にアンケート調査、面接調査を行った結果をまとめたものである。

1980年代から創価学会が韓国で教勢を拡大し、公称現在140万人の信者を獲得して、韓国第4の宗教勢力となったが、同時期の日本において韓国のプロテスタント教会が盛んに宣教活動を行い、日本のキリスト教にペンテコステ運動やカリスマ運動的な傾向の強い福音主義の影響を与えた。このような宗教の相互交流が、どのような社会状況、歴史的経緯において発生したのかを、調査票調査と事例調査により明らかにしようとした。

本論文の内容は、第Ⅰ部「近現代における日韓両国の宗教文化の展開」では先行研究のレビューと本論文の理論的枠組みを提示した。第1章「日韓における社会変動と宗教文化の変貌」では、現代の日韓両国における宗教状況を概観し、第2章「海外における日韓の宗教の展開」では、日本の新宗教と韓国のキリスト教の海外布教に関する先行研究を踏まえて、韓国における日系新宗教と日本における韓国系キリスト教の受容について先行研究を検討した。

第Ⅱ部では韓国における日系新宗教の事例分析を行った。第3章「韓国の宗教市場と日本の新宗教——韓国創価学会を事例として——」では、創価学会が、日本の植民地支配に起因する反日感情が根強い韓国社会において、都市生活者のニーズに適応して教勢を拡大したと述べ、第4章「韓国における日本新宗教信者に関する一考察——韓国生長の家を中心に——」では、韓国生長の家（＝光明会）信者の特徴を明らかにした。第5章「異文化交流の可能性と課題——韓国世界救世教に着目して——」では、日本宗教信者というレッテルを克服すると同時に、教団の認知度獲得およびイメージの改善に努力していることを論じた。第6章「『似而非宗教』と『倭色宗教』のあいだで——韓国天理教『3世信者』の信仰継承過程における『他者』の影響——」では、同年代の仲間集団と親の寛容的な宗教教育態度が、3世信者の信仰生活の保持・深化に影響を及ぼしていることを明らかにした。

第Ⅲ部では日本における韓国系キリスト教会の事例分析を行った。第7章「拡散する韓国のキリスト教と日本」では、韓国系キリスト教主流派とペンテコステ派が共に日本宣教を行う背

景を考察した。第8章「日本における韓国系キリスト教会の動向に関する一考察——純福音教会を中心として——」では、純福音教会が日本人信者の獲得よりも日本のキリスト教会における聖霊運動の高揚に貢献したことが分かった。第9章『韓流』と韓国系キリスト教会——日本人メンバーの複層化に着目して——」では、韓国系キリスト教会に参加している日本人信者が複層化していることを明らかにした。第10章「日本での定着をめぐる『旧』・『新』韓国系教会の再編成——20の教会間比較を通して——」では、「旧来」の教会が「民族教会」としてのプライドを保持しようとする傾向があるため信者のニーズに柔軟に対応できていないこと、「新来」の教会が日本人・中国人・朝鮮族・野宿者へと、次々と新しい信者を獲得するために多様な布教戦略を模索していることを明らかにした。

以上の分析結果は、次の二点において大いに評価されるべきものである。

第一に、韓国側の調査は、韓国学術振興財団による研究助成によって実施された「日韓宗教の相互実態に関する調査」「日本大衆文化開放による日本系宗教の教勢および受容者の意識変容に関する調査」に李賢京氏がRAとして加わり、大規模なアンケート調査を行った後に、数年かけて李賢京氏が単独でフォローアップ調査を行ったものであり、韓国の日系新宗教の現状を把握する観点と資料を提示した。日本側の教会調査でも、韓流ブームを利用した韓国系キリスト教会による宣教という俗説が現状とは合致しないことを明らかにしている。すなわち、信者周辺に留まる日本人と、聖霊体験を求めて伝統的なキリスト教会を離れて移動してくる日本人や在日コリアンの複合的な信者層を描き出している。

第二に、外来宗教が伝播・受容される条件として、当該社会の政治・経済変動、都市化、消費社会化、政教関係という社会背景を考察した上で、韓日双方における個別教団の布教方法、信者の入信動機や宗教活動を詳しく調べ上げている。韓国側では、高度成長期と創価学会の現世利益主義や都市内コミュニティ形成の方法、世界救世教による浄霊と健康ブーム、天理教では世代間の信仰継承を考察する。日本側では、純福音教会のペンテコスタリズム、メガ/セル・チャーチの組織運営、オンヌリ教会の韓流という文化戦略や、在日大韓基督教会と在日コリアンコミュニティといった多様な宗教社会学的な諸問題について知見の提示がなされている。

しかしながら、本論文で用いた宗教市場論による韓日宗教文化の相互受容という説明は、必ずしも審査委員を納得させるものではなかった。むしろ、宗教市場論という一つの説明原理を導入することで、極めて複合的な文化・歴史・社会的諸条件について考察した各章の分析の鋭さが薄れてしまうきらいがある。韓国の宗教市場、日本のキリスト教会といった一律の宗教ニーズで説明せずとも、個別教団の布教方法や受容の局面は多様であるということでもよかったのではないかと考えられる。経済市場と宗教文化市場、一般的な消費財と宗教財、それぞれの相違に留意すること、信者の意識調査によるニーズと充足という後付的な信仰的証言データに加えて、教団の布教戦略（折伏や伝道方法等）、信者育成の方法や組織運営といった社会学的な分析を今後新たに展開していくことが望まれる。

なお、口述試験において上述の問題点をただしたところ、李賢京氏自身がそれらに関して十分自覚していた。また、審査員の意見は博士論文としての評価を減じるものではなく、本論文で展開した調査研究のさらなる発展可能性を示唆するものであった。李賢京氏は博士論文の調査研究の過程において、日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用され、国際学会でも研究発表を行い、各章のもとになっている個別論文を宗教研究、宗教社会学の査読付き専門誌に博士課程在学期間で計4本単著論文として公開している。このような研究の進展状況からも、本博士

学位申請論文が学術的に高く評価しうる水準で執筆されたことが認められる。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。